

ソーローと現代方言

伊豆利島といえは、いまだにふだんの会話にソーロー言葉を使うということまで有名である。もっとも実際に調べてみると、「サソロー」とか、「之無クソーロー」などのような、戦記文学や古典的な書簡文に見える表現でしゃべっているわけではない。「行くか」と聞かれた場合に「行コソーロー」と言ったり、「行カンソーロー」と言ったりする、つまり文法でいう切れる形に付けて、終助詞的に使うことがあるにすぎない。それも活用を欠き、略してソーとだけ言うこともある。その意味は、土地の人にたずねると、ソーローが付くと、言い方が強くなるのだという。丁寧の意味を付与するのではないという。「行コソーロー」「行カンソーロー」は、東京などという「行クサ」「行カナイサ」にそれぞれあたるものようだ。

このように見てくると、これに似た言い方は、各地の方言にあることに気付く。石田春昭氏の「隠岐方言の研究」によると、隠岐島の一部では、サラという語を文末に付けて、「サラを言わんのは私ひとりだサラ」のように言うというが、あの地方は、アウ↓アーの音韻変化の例の多い地方である。これはサウラウの転化したものに相違ない。サラの意味はどういうのであろうか。高柳寿雄氏の「しんしろのことば」によると、愛知県三河新城地方で

は、「あわてないでゆっくりやるさ」を、アワテンデユックリヤルソというそだ。これも、ソーローが利島に現れているようにソトとなって、さらに短くなったものではないか。

押見虎三三氏の「秋山郷の言語構造について」（新潟大学教育学部長岡分校研究紀要第二輯所載三一―三二）によると、新潟県中魚沼にはスオーという終助詞があるそうであり、清水茂夫氏ほかの「奈良田の方言」によると、山梨県南巨摩郡西山村字奈良田で、イソという語源不明の終助詞が多く使われるという。このイソのソもソーローの名残りかと疑われる。さらに、さきに引合いに出した東京語の「ソウサ」「行クサ」のサも、どこかの方言が、アウアーという音韻変化の傾向をもって古い時代のサウラウがサーとなった、それを江戸語が輸入したので、これもソーローの名残りではないのだろうか。

もつとも、こういうことを言うためには、中世の京都語でも、ソーローという語を、恐らくそれがすたりかけた時期に、今の東京のサというような意味に用いられた時代があったというような例証がほしい。どなたか御存じの方はありませんか。

（金田一春彦）